

この夏読みたい

ミステリー

ミステリー小説は普段読まないという方から、
ミステリー好きという方まで楽しめる5冊を紹介します。



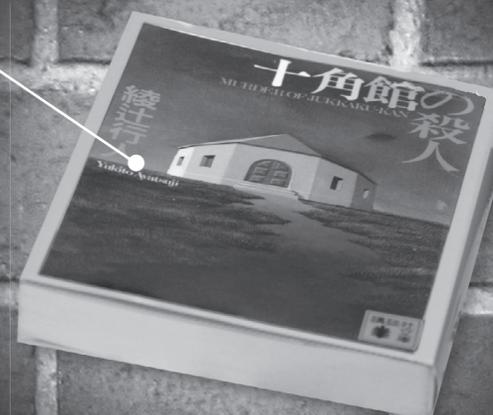
最後に生き残るのは誰か

『十角館の殺人』

九州のとある孤島。十角形の館。集まった7人のミステリー好きの大学生たち。そこで起きる連続殺人は、半年前の事件の再現か、復讐劇か。仲間たちが次々と殺され、恐怖と疑心暗鬼に追い詰められながらも、彼らは事件の真相へと追っていく。

この小説の見所は、なんといっても多くのミステリー愛好家をうならせたと評判のトリックにある。十角形という特徴的な館の構造、孤島という閉鎖された空間を利用したトリックは巧妙だ。キーワードは”ミスディレクション”。マジックを見ているかのように鮮やかに繰り広げられるこの物語を、ぜひ味わっていただきたい。

綾辻行人著／講談社文庫／730円



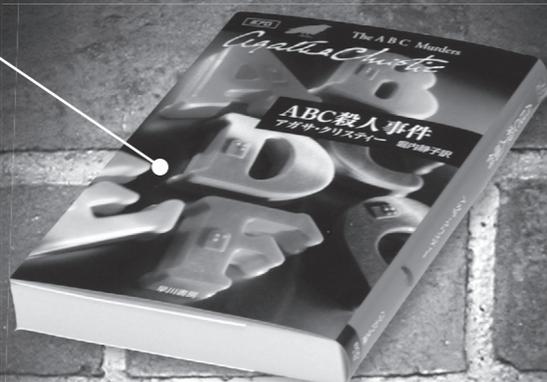
謎の人物ABCからの挑戦状

『ABC殺人事件』

ある日探偵ポアロのもとに届いた手紙は、事件の発生をほのめかすものだった。イギリスの各所でA、B、Cの頭文字を持つ人たちが順に殺され、死体のそばには必ずABC鉄道案内が置かれている。犯人を追うポアロは被害者の身内や知人たちと即興の探偵団を作るが、次の事件が起きてしまう。

テンポ良く展開されるストーリーと個性豊かな人々がこの作品の持ち味だ。事件だけでなく、恋や欲望に駆られて必死になっている脇役たちも魅力である。この作品はミステリー愛好家にはおなじみだが、普段あまり推理小説を読まない人にこそおすすめしたい。

アガサ・クリスティ著／堀内静子訳／ハヤカワ文庫／840円



トラウマは人生を左右するのか

『千里眼 The Start』

岬美由紀は航空自衛隊のパイロットであったが、不祥事により空自を去る。前半では、美由紀が並外れた動体視力と頭の回転の速さにより、表情の変化から感情を読み取る能力を身につけていく。後半ではその「千里眼」と呼ばれる能力や行動力を武器に、航空機爆破の危機を察知、回避する。

この作品の魅力は、何といっても美由紀のキャラクターにある。犯人との頭脳戦を繰り広げ、自ら状況を打開していく姿に、読者は爽快感をも覚えるだろう。シリーズものの第1作であり、普通のミステリーに飽きた読者にもおすすめしたい。

松岡圭祐著／角川文庫／540円



悪魔のメロディにヒントあり

『悪魔の手毬唄』

時は昭和30年、鬼首村と呼ばれる岡山の鄙びた山村を1人の探偵・金田一耕助が訪れた。静かな田舎で休養を取るはずだった彼は村で奇怪な連続殺人事件に遭遇する。その殺人は村に古くから伝わる手毬唄の歌詞になぞらえられたものだった――。

事件の鍵を握る手毬唄は、プロローグで読者に明かされるが、作中で金田一耕助が手毬唄の存在を知るのは物語の中盤を過ぎてからになる。つまり、読者は探偵よりも早く殺人の暗号に気づくことができる。手毬唄のヒントを駆使してあなたは金田一より先に犯人を見つけ出すことができるだろうか。ぜひ難事件を追ってほしい。

横溝正史著／角川文庫／740円



社会の闇に囚われた、男の過去

『砂の器』

東京のとある電車車庫にて、1人の男性の他殺死体が見つかった。残された手がかりの少なさから捜査は難航、捜査本部は解散するが、2人の刑事は粘り強く調査を続ける。彼らが解決のために奔走するなか、芸術家として世間の注目を集め政治家の娘と婚約し、まさに栄光の座を掴まんとする青年がいた。

人は過去を捨てることは出来ない。それを隠そうと虚構の自分を作り、そこに虚構の栄冠を掲げようとしても、その栄冠は砂のように崩れ去ってしまう。差別という捨てきれない重い過去を背負う男とそれを追う刑事の人間性を鮮明に描く名作である。

松本清張著／新潮文庫／上・660円、下・700円



はみだし
すてーじ

靴の中に鉛ちゃんを常備するようになった
⇒ア리가来そうですね。

(農・1 10式)
(靴に入れればいいのに；編)

はみだし
すてーじ

病院にいかうと思ったら、風邪が治った
⇒病院に行ったら、風邪が悪化した。

(教・3 よっぴー)
(熱、のどの痛み、その他に苦しみながらの執筆です；編)